

の創作・鑑賞指導を求めて』という大部な一冊を、作者から送ってもらった。中に『萬葉』歌人の日記を書こう』と題する一章があつておどろいた。工夫してさまざまな試みのある授業をしておられるらしい。

つんとくる香辛料を鉢に播る秘薬をつくる作業にも似て
鈴木陽美

一首中で「秘薬」のイメージ、リアリティをどう確保するかがむつかしいところだと思う。この歌は四首目に置かれているが、五首目以下に母が若い頃（つまり作者が幼い頃）の歌が並んでいるので、そのイメージに染められて四首目のこの歌の「秘薬」もある、そう読んでいいだろう。

この字の奥、僅かばかりのペランダに白のマスクが光つて揺れる
菊池鏡子

この字型のビルなのかな、と思つて読んだ。マスクだけががあるのか、マスクをした人がいるのか、どちらとも読める。どちらでもいいだろう。図形の面白さを前面にだしたアイデア。

一人ではやはり恐ろし妙齡の血の多さうな二女を伴ふ
関沢由紀子

この作だけ読むと、何か不思議な物語めいた場面を思い浮かべるかもしれないが、献血に出かける時の歌と分かつて、ユーモアが味わかる。「妙齡の血の多さうな」がなんとも可笑しい。今月の「心の花」には、ワクチン接種の歌が多いが、これは献血。

脱ぎ捨てし手袋の指は突つ立ちてごみ箱覗く我を指

差す

高橋 秀

病院で働く人たちは、この一年半のあいだのコロナ騒ぎで疲労困憊してしまっている。辞めたくても辞められない切羽詰まった事情がうたわれている今月の八首は、短歌の問題、表現の問題をこえて医療現場の切迫した空気を伝えて切実である。この作の結句にもそうした切迫感がにじんでいる。

顔を見せてペットボトルを並べゆく出陣前の兵士の
ごとく
増田満美子

スーパーかコンビニの商品陳列の現場の仕事に取材した今月の一連。私たち客は知らないことながら、言われてみれば、そうなのかと思ひ当たることながら、なるほどと納得することばかりだ。掲出歌はボトルを一本ずつ向きを確認しつつならべてゆく作業。

形
最近は列ができそうな場所には立ち位置を示す足形が貼られていたり描かれていたりする。能楽堂では足袋の形のシールが貼られているのだという。小さな発見だが、楽しい発見である。

森屋めぐみ

マスクすれば魔女の存在親しくてマスクの内に唱える呪文
佐佐木朋子

マスクの歌をずいぶん多く読んできたが、「魔女」を連想した短歌ははじめて読んだ気がする。外見ではなく、つまり、どう見えるかではなく、社会への向かい方がここでは問題になっている。